

氏名	東屋敷 尚子
ヨミガナ	ヒガシヤシキ ナオコ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音351号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 モンテッソーリ教育における音楽指導の本質と役割ー改革教育運動期のドイツにおける教育メソッドの受容過程および音楽指導の検討を通してー

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	山下 薫子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	佐野 靖
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	塚原 康子
（副査）	東京大学	教授	（大学院教育学研究科）	山名 淳

（論文内容の要旨）

本研究は、モンテッソーリ教育における音楽指導の本質と役割を明らかにするため、改革教育運動期（ca. 1895-1933）のドイツに着目し、教育メソッドの受容過程および「子どもの家」における音楽指導の実際の分析、検討を行うものである。

本研究は、①改革教育運動の背景と実態、およびその特徴の明確化、②*Musikpflege im Kindergarten*の分析を通じた改革教育運動期における幼児を対象とした音楽教育の変容過程の解明、③改革教育運動期にドイツにおいて出版された教育学およびモンテッソーリ教育に関連する資料の調査、およびその分析に基づくモンテッソーリ教育の思想的・実践的受容過程の検討、④改革教育運動期のドイツにおけるモンテッソーリ教師の著作物の分析、検討を通じた「子どもの家」での教育実践の実態解明の4点の手続きによって進められる。

第1章では、モンテッソーリ教育が受容され発展した時期の、時代背景、教育学的背景を明瞭にするため、改革教育運動の発端と展開に着目し、その特徴を明らかにした。「《子どもから》の教育学」への転換を目指し、ドイツにおいて展開された改革教育運動は、他国において展開された教育改革運動とは異なる2つの特徴をもち合わせていたことが明らかになった、①文化批判を基底とした文化運動を発端とする、学校という枠組みを越えた幅広い展開、②政権を握るSPDによる大規模な教育の民主化や教育の量的拡大や質的向上の試みの展開である。

第2章では、モンテッソーリ教育が受容され発展した時期の音楽教育学的背景を明確にするため、音楽教育の変容を検討した。改革教育運動期において音楽教育は、子どもの外的および内的な成長を促す全人教育としての性格が強まり、教師の経験をもとに伝授する教授方法から、子どもの個々の内面表現を重視し、創造性を育もうとする教授方法への転換が生じた。また、ジャック＝ダルクローズの音楽教育の一般化や、全人教育的性格を強くもち、音楽の学習そのものに目的が限定されない音楽育成の出現により、幼稚園では音楽育成に重きが置かれ、幅広い音楽活動を通して子どもの心身の発達や育ちに関わるものが強く求められたことを明らかにした。

第3章では、モンテッソーリ教育の受容過程を思想、実践の両面から検討した。既にフレーベルの教育思想および伝統的なフレーベル主義による幼稚園が確かな地位を築いていたドイツにおいて、モンテッソーリの教育思想は批判的な見方をされることも多かった。しかしながら近代社会を担う新しい人材の育成を急務とし、伝統的なフレーベル主義に対する反省も求められていたドイツにおいて、教育メソッドは批判の中でも支持され、導入された。更に、独自の教師養成コースの開講によって、その教育メソッドはより多くの人に知られ、教育実践の場の拡充を可能にしたことを明らかにした。

第4章では、当時のドイツにおけるモンテッソーリ教師による著作物の分析および検討を行った。「子どもの家」では、教具を用いた活動よりも、身体運動を伴う音楽活動を通して、子どもが喜びをもって、楽しみながら音楽的な感覚や身体感覚を無意識的に身につけることが重要視され、そのために人的環境を含む音楽的環境の整備と充実が図られていたことが明らかになった。プレスラウの「子どもの家」では、ダルクローズ教師との協働が見られたが、この協働により、音楽指導はモンテッソーリの教育理念を保ちながらも、幅広く充実したものへと独自の発展を遂げ、段階的、系統的に子どもの創造性を育むことが可能となったことを明らかにすることができた。

本論を通し、モンテッソーリ教育における音楽指導の本質として次の3点を見出した。

①音楽指導では、音や音楽を「聴くこと」に重点が置かれているということ。

②身体運動を伴う音楽表現活動を通して、子どもが喜びをもって楽しみながら音楽的な感覚や身体感覚を無意識的に身につけることが重要視され、そのために音楽的環境の整備と充実が不可欠とされていたこと。

③「聴く」、「動く」、「表現する」という音楽的経験を通して、子どもの外的および内的な成長を促すことが目指されていたこと。

以上から、モンテッソーリ教育において音楽指導が、子どもの外的および内的な成長を促す全人教育としての役割を果たしていると言うことができる。また、ここから、我が国における幼児の音楽教育活動との共通性も見出すことができた。

本研究は、改革教育運動期のドイツに限定した文献研究である。今後は、就学児への音楽指導も研究対象とし、現在のドイツにおけるモンテッソーリ教育の音楽指導に関する文献研究、実践研究を進めるとともに、関連する他のメソッドに関する調査も行い、受容期から現在に至る音楽指導の全貌を明らかにしたいと考える。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、モンテッソーリ教育における音楽指導の本質と役割を、ドイツ国内に残る改革教育運動（19世紀末から1930年頃）当時の文献に基づいて明らかにしたものである。モンテッソーリ教育は、20世紀初頭、イタリアのMaria Montessori（1870-1952）によって考案されたとされるが、その音楽指導の理論と実践は、彼女の弟子や協力者たちによって徐々に形づくられていったものである。申請者は、修士論文（2011年度）において、モンテッソーリとその弟子、マッケローニの著作物を分析し、音楽指導の理念と内容の一端を明らかにした。最近になって、音楽指導の全貌を明らかにしようとする他の先行研究も現れつつあるが、その大部分が第二次世界大戦後になってからまとめられた著作物に基づいたもので、考案当初の音楽指導の具体や子どもの成長発達の様子を描き出した研究は見られない。そのような中、当時の実践資料がドイツ国内に多く残されていることを突き止めた申請者は、社会的背景や教育思想の歴史的変遷をも踏まえた上で、モンテッソーリ教育の施設「子どもの家（Kinderhaus）」における音楽指導の実態を検討することにより、その本質を明らかにできると考えるに至った。なお、ドイツでの資料の収集は、2017年9月から2020年2月の間、計4度にわたって実施されている。

本論は、4つの章からなる。まず第1章で、実利主義的思想への批判と文化運動に端を発したドイツの改革教育運動が学校の枠組を超えて展開されたこと、第一次世界大戦後のドイツ社会民主党政権下において教育の民主化が他国にない規模で展開されたことを概観した。第2章では、この時期に「《子どもから》の教育学」への転換が生じ、それを具現化する一つの方法としてスイスのジャック＝ダルクローズの指導法がドイツ各地へと普及したこと、そして幼児教育においては調和のある人格形成へと導く音楽育成（Musikpflege）に重点が置かれるようになったことを指摘した。第3章では、ドイツに初めてモンテッソーリ教育が紹介された1912年当初、すでに一定の地位を確立していたフレーベル主義の幼児教育施設から強い批判を受けながらも、第一次世界大戦の敗北後、新たな教育方法を模索する風潮の中でモ

ンテッソーリ教育が支持され浸透していくというダイナミックな過程を描き出した。そして第4章では、モンテッソーリ教師たちによる記録に基づいて、ベルリン＝ランクヴィッツとベルリン＝ヴィルマースドルフ、ブレスラウの「子どもの家」における音楽指導の実際を活写することができた。

結論として、申請者は、モンテッソーリにおける音楽指導の本質を次の3点に要約している、①音や音楽を「聴くこと」に重点が置かれた音楽指導であったこと、②身体運動を伴う活動を通して音楽的な感覚や身体感覚を無意識的に身に付けることが重要視され、環境の整備と充実が不可欠とされたこと、③「聴く」「動く」「表現する」という音楽経験を通して全人教育としての役割を果たしていること。

学位論文審査会においては、改革教育運動期の音楽教育全体の動向にまで踏み込んで丁寧に考察した点、「子どもの家」で実際に音楽指導に携わった教師たちの記録に基づいて緻密な読解がなされている点、そして多義性をもつドイツ語の意味がうまく整理され示唆に富む解釈となっている点などについて、高い評価が得られた。他方で、鍵概念についてより詳細な説明が欲しいこと、環境を重視するモンテッソーリ教育については教師の力量によるところが大きいと教員養成の面からも検討する必要があることなど、今後の研究へとつながる課題についての指摘があった。

以上を総合的に判断し、課程博士の研究として大変優れた成果をあげたと認めて、全会一致で合格と判断した。